

未来に活かしたい、先人たちの思い

温故知新

第3回

シーボルト記念碑

〈坂本キャンパス 医学部 記念講堂前〉



碑の支柱にはラテン語で、「見られよ！君達の植物が此にくる年毎に緑そひ、さきいでて、そが植えたる主を忍びては、愛でたぎ花の鬘をなしつづあるを」と刻まれています。これはシーボルトが、先にオランダ商館医として活躍したケンペルとツュンベリーの功績を讃え、出島に建立した顕彰碑に刻んだ銘文と同じものです。訳したのは、精神科医でシーボルトの伝記などを著した呉秀三博士。碑の裏面に記されています。

坂本キャンパス



■シーボルトの功績

出島のオランダ商館医、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（1796-1866）。鳴滝塾を開き、全国から集まった門下生たちに西洋医学や蘭学を伝授した人物として知られています。

シーボルトはドイツのヴェルツブルグ生まれ。祖父も父も叔父もヴェルツブルグ大学医学部教授という名門の家柄で、自身も同大学で医学や博物学を学びました。このとき修得した幅広い知識と研究手法は、のちに来日した際、大いに活かされることとなります。

1823年（文政6）27才のとき、日本研究の使命を密かに帯びて出島へ赴任。学識豊かなシーボルトは長崎奉行の好意を得て、出島の外に出て患者を診察・治療することや、薬草を採取することを許されました。その後、幕府の許可を得て鳴滝塾を開設。シーボルトのもとに集まった諸藩の俊英らは150人を超えたと伝えられています。

門下生に西洋の知識を提供する一方で、彼らにテーマを与え、日本について幅広い情報を集めたシーボルトでしたが、1828年（文政11）、その活動が発覚。翌年国外追放となり、長崎を離れました。

残された弟子たちは医学の発展に尽力したり、蘭書を翻訳するなど幅広い分野で

活躍。一方、帰国したシーボルトは、『日本』、『日本植物誌』、『日本動物誌』を著し、ヨーロッパに広く日本を紹介しました。シーボルトの研究成果は、当時の日本を知る貴重な資料として、いまも高く評価されています。

■原爆で失った兄弟たちへ

日本の近代化を導いたシーボルトの功績を讃えるこの碑が、実は原爆の慰霊碑でもあることは、あまり知られていないようです。碑を寄贈したのは、医学部（当時長崎医科大学）で学んでいたご兄弟を原爆で失った、高井幸雄氏（医学博士）と西大由氏（当時東京芸術大学教員・彫刻家）です。碑の中央に掲げたシーボルトのレリーフは西氏が制作しました（※大病院玄関前「水壺を捧げる子供像」も同氏の作品）。碑の裏面には、次のように記されています。

東西文化交流の恩人シーボルト先生の尊影を、この学園に掲げ、朝夕若い学徒に深い感銘と心に火を燃やすことの出来るのは、医学博士高井幸雄氏と東京芸大教官西大由氏の心からの厚志によるものである。

この岡に眠る両氏の兄弟と多くの学徒の御霊よ永遠に安らかなれと祈る。

一九六二年秋 長崎大学長 北村精

髭をたくわえたシーボルトのレリーフについて、「肖像画で見ると優しい表情をしている」と指摘した人がいるそうです。兄弟の霊を慰める作者の思いを感じとったのかも知れません。

◆出典／学園だより第33号（昭和47年12月）

出島の科学 ～日本の近代化に果たした

オランダの貢献

●取材協力／相川忠臣氏（長崎大学名誉教授）、長崎大学施設部